

『身近に感じる国際金融』は私たち著者一同の願いを込めたタイトルです。

金融論は学部学生の間で取っつきにくいイメージをもたれているように感じます。学生のみなさんにとって金融に接する機会というのが、銀行預金の出し入れやクレジット・カードのリボ払いなどに限定されるため、なかなか金融の中身をイメージしにくいのだと思われます。ましてや「国際」金融論となると、さらに難しそうな印象を受けるのではないのでしょうか。

ですが、国際金融論が扱う問題は新聞・テレビのニュースで頻繁に報道されています。円ドルレート、日米貿易摩擦、「パナマ文書」から、アメリカの金融政策、世界金融危機（2008～09年）、ギリシャ危機（2010～15年）まで、これらはすべて国際金融論の対象になります。頻繁に報道されるということは、これらの情報を必要とする人がたくさんいるということでしょう。いまや日本の大企業のほとんどは世界のさまざまな地域に工場や支社を持ち、さまざまな地域を相手に商品を輸出したり原料や部品を輸入したりするグローバル企業になっています。中小企業のなかにも中国などアジアに進出したり、外国との貿易を行ったりする企業が増えていきます。私たちが普段購入する服、食料品、電化製品などの多くが「made in China」「made in Chile」などとなっており、「made in Japan」の割合はとてま少なくなっていることからわかるでしょう。要するに、上に挙げたようなニュースは一見すると身近には感じられないかもしれませんが、私たちの消費や、みなさんのお父さん・お母さんが勤める会社の業績に大きな影響を与えるという点で身近な問題なのです。

日本では少子高齢化による人口減少が止まらないため、国内市場（日本国民による商品やサービスの消費額）は縮む一方です。そのため、これからは日本企業の海外進出がますます進むことでしょう。そうなれば、将来日本企業で働くみなさんにとって国際金融の諸問題は一段と身近なものとなるはずですが。大学で教えている著者たちは卒業生と会う機会がしばしばあります。そこでよく卒業生から「先生、為替レートはこれから円高か円安のどちらに動くと思いますか？」と聞かれたり、「いま仕事で海外からの資材の調達を担当していますの

で、学生のと きにもっとしっかりゼミの勉強（為替レートや国際金融の勉強）をしておけばよかったと後悔しているんですよ」と告白されたりします。学生時代にはなかなか身近に感じられなかった国際金融の問題が、社会に出ると急に身近に感じられるということではないでしょうか。

そうであれば、なおいっそうのこと学生時代に国際金融をしっかりと学んでおいてほしい。そのためにも、一人でも多くの学生のみなさんに国際金融を身近に感じてほしい。そして国際金融論を食わず嫌いしないでほしい。学生のみなさんが苦労なく通読できるような国際金融論のテキストを提供することでその助けになりたい、という思いから本書を執筆しました。

このような思いのもとに、私たちは何度も会合を重ね、国際金融論の講義のなかで学生のみなさんにわかりにくいところ、逆に興味をひきやすいところについてかなり突っ込んだ話し合いを行いました。他方で、講義を行う者として、学生のみなさんにぜひとも知っておいていただきたいこともあります。「学べきこと」について私たちの念頭に常にあったのは長年にわたって版を重ねてきた『現代国際金融論』（上川孝夫・藤田誠一・向壽一編、有斐閣、初版1999年刊）でした。私たちのそれぞれが何らかの形で『現代国際金融論』の編者の先生方から薫陶を受けて学んできたためです。時代の変化にマッチした論じ方をする一方で、これまで国際金融論が積み重ねてきた成果の一番の「おすすすめ」の部分をいかに学生のみなさんに伝えるか、しかも「身近に感じる」ように――。

試行錯誤の末、本書では、他の国際金融論のテキストに比べると、紹介するトピックスの量を抑え、その代わり1つひとつのトピックをわかりやすい言葉で丁寧に解説するよう心がけました。扱うトピックスの量は少ないものの、理論、制度、歴史、現状という4つの視点からバランスよく国際金融の問題を紹介していますので、本書を通読すれば国際金融の基礎は十分に身に付くと思います。全体で7章と類書に比べてコンパクトな構成にすることで、はじめて国際金融論を学ぶ人が単独でも十分読み通せるように工夫したつもりです。加えて、数式や記号は使っていませんので、数学が苦手な人にとっても読みやすくなっています。

そのため、本書は、経済学部、商学部、経営学部の専門科目としてはもちろんのこと、一般教養科目としての国際金融論とその関連科目のテキストとして

も十分に活用できるでしょう。第1章から第6章についてはそれぞれ2回の講義で、第7章はとくに話題が多岐にわたっていますので3回の講義で説明していただければ、全15回の講義で一通り解説することが可能となっています。

本章執筆の背景はこのようなものです。ただし、私たちの意図が本書のなかでどの程度実現されたかは、本書を読まれる学生のみなさんの厳しい評価に委ねられています。しかし、もし幸いに多少なりとも私たちの意図がみなさんの関心に合致したとしたら、その結果をもたらしたのは編集担当の長谷川絵里さんかもしれません。長谷川さんは常に学生のみなさんの視点に立って、私たちの試行錯誤に現代性と方向性を与えてくれました。

最後に改めまして、本書を通して一人でも多くの読者のみなさんが国際金融論を今までより身近に感じ、国際金融に対して興味をもってくれることを願っています。

2017年4月

著者一同

*本書の第3章・第5章は、JSPS 科研費 16K03766 の助成を受けた成果の一部を含みます。

飯島 寛之 (いじま ひろゆき)

第2章, 第7章 1, 2節

立教大学経済学部准教授

1976年生まれ。立教大学大学院経済学研究科博士課程後期課程単位取得退学, 博士(経済学)

主要著作: 「1990年代後半以降のアメリカの対外ポジションの変容と対外投資収益」『立教経済学研究』第61巻第2号, 2007年; 『国際通貨体制と世界金融危機』(分担執筆) 日本経済評論社, 2011年; 『現代アメリカ経済分析』(分担執筆) 日本評論社, 2013年

五百旗頭真吾 (いおきべ しんご)

第1章, 第4章

同志社大学商学部准教授

1975年生まれ。神戸大学大学院経済学研究科博士後期課程修了, 博士(経済学)

主要著作: “The U. S. Current Account Deficit and the Dollar: Another Implication of an Incomplete Pass-Through,” *The International Economy*, No. 10, 2006; 「バススルーの低下は為替レートの経常収支調整機能を弱めるのか」『金融経済研究』第25号, 2007年; “Two Patterns of Current Account Reversal: Shift-type and V-shaped,” 『社会科学』第43巻第2号, 2013年

佐藤 秀樹 (さとう ひでき)

序章, 第6章, 第7章 3, 4節

金沢大学人間社会研究域経済学経営学系准教授

1975年生まれ。横浜国立大学大学院国際社会科学研究所博士課程後期グローバル経済専攻修了, 博士(経済学)

主要著作: 『国際通貨体制と世界金融危機』(分担執筆) 日本経済評論社, 2011年; 「銀行同盟の建設と進展」『日本EU学会年報』第35号, 2015年; “Construction of the European Banking Union: Relations with the European Banking Authority and Financial Stability Board,” *Discussion Paper Series*, Kanazawa University, No. 32, 2017.

菅原 歩 (すがわら あゆむ)

第3章, 第5章

東北大学大学院経済学研究科准教授

1972年生まれ。京都大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得退学, 博士(経済学)

主要著作: 『国際銀行とアジア 1870-1913』(分担執筆) 慶應義塾大学出版会, 2014年; *History of the IMF*, (分担執筆) Springer, 2015; 『オバマ政権の経済政策』(分担執筆) ミネルヴァ書房, 2016年

目次

| | |
|------|----|
| はしがき | i |
| 著者紹介 | iv |

CHAPTER 0

身近に感じる国際金融 1

国際金融とは何だろう (2) 本書の構成 (3) 4つの観点
(5) 本書の使い方 (5)

CHAPTER 1

外国為替市場と為替相場 7

為替の動きをいかに読むか

はじめに (8)

- 1 外国為替市場 9
外国為替市場 (9) 24時間市場 (9) 為替相場 (11) ビッド相場とアスク相場 (12) 銀行間市場と対顧客市場 (13) 市場参加者 (13) 為替ブローカーと電子ブローキング (15) 外国為替証拠金取引 (15) フォワード取引 (17) 為替スワップ (18) 仮想通貨と海外送金 (19)
- 2 為替相場の影響 20
円安の影響 (20) 実質為替相場 (21) 実効為替相場 (22)
- 3 インフレ率と為替相場 24
購買力平価説 (25) 商品裁定：購買力平価の原理 (26)
- 4 金利と為替相場 28
カバーなし金利平価 (28) 外貨預金と為替リスク (29) 外貨預金の期待収益率 (30) 金利平価式の導出 (31) カバー付き金利平価 (32)

どの国と、何をどれだけ取引しているのか

はじめに (36)

- 1 国際収支統計の枠組み 36
国際収支統計 (36) 国際収支統計の特徴 (37) おもにモノのやり取りを把握する「経常収支」(38) おもにカネのやり取りを把握する「金融収支」(40) 経常収支と金融収支の関係 (41)
- 2 経常収支分析の枠組み 44
経常収支赤字は「損」? (44) 経常収支赤字の意味 (45) 弾力性アプローチ：経常収支を為替相場から考える (47) マーシャル＝ラーナー条件 (47) 「通貨安政策」は行われている? (48) Jカーブ効果 (48) 市場別価格付け (Pricing to Market) (49) 経常収支と国民所得勘定 (50) アプソーブション・アプローチ：経常収支を国内総生産と国内需要から考える (50) 貯蓄・投資バランス・アプローチ：経常収支を国内の貯蓄と投資から考える (51) 一国の長期的・構造的な関係を表す貯蓄・投資バランス (52)
- 3 国際投資と国際資本移動 53
金融収支と国際資本移動 (53) 時代を映す地域間資本移動 (54) 外貨準備と為替介入 (56) 準備資産としての外貨準備 (57)
- 4 通貨・金融危機と国際収支、対外資産負債残高 58
グローバル・インバランス (58) 世界金融危機と国際資本取引 (59) 対外資産負債残高 (61) 危機の可能性を把握する (62)

どこで、誰が、何を取引しているのか

はじめに (66)

- 1 国際金融市場の定義 67
国際金融市場はどこですか? (67) 国際金融市場とは何か：第1の What (67) 国際金融市場の「場」：Where (69) どのように取引するか：How (69)
- 2 国際金融市場の参加者とその目的 70

国際金融市場の参加者：Who (70) 市場参加者の目的：
Why (71) 裁定 (71) ヘッジ (72) 投機 (73)

| | | |
|---|--|----|
| 3 | デリバティブ市場 | 74 |
| | 何を取引しているのか：第2のWhat (74) 原資産と原資産市場 (75) デリバティブとデリバティブ市場 (75) 先物とフォワード (76) スワップ (76) オプション (78) いつ取引をしているのか：When (79) どれだけ取引をしているのか：How Much (79) | |
| 4 | ユーロ市場とオフショア市場 | 81 |
| | ユーロ市場 (81) オフショア市場 (82) | |
| 5 | 投機への批判と投機の機能 | 83 |
| | 国際金融市場と投機 (83) 投機への批判 (85) 投機の機能 (86) 投機への規制の試み (87) トービン税と金融取引税 (88) | |
| 6 | タックスヘイブン | 89 |
| | タックスヘイブンとは何か (89) なぜ税が回避できるのか (90) タックスヘイブンへの批判 (90) タックスヘイブンへの批判の強まり (91) | |

はじめに (96)

| | | |
|---|--|-----|
| 1 | 為替相場制度 | 97 |
| | IMFによる分類 (97) 変動相場制 (97) 固定相場制 (99) 厳格な固定相場制 (101) 通貨同盟 (101) | |
| 2 | 外国為替介入 | 102 |
| | 為替介入とは (104) 為替介入と外貨準備の関係 (104) マネタリーベースとマネーストック (105) 為替介入と通貨供給 (106) 不胎化介入 (107) 介入の効果 (108) 日本の為替介入 (109) | |
| 3 | 為替相場制度とマクロ経済政策 | 110 |
| | マンデル＝フレミング・モデル (111) 変動相場制下の金融政策 (112) 固定相場制下の金融政策 (113) 変動相場制下の財政政策 (115) 固定相場制下の財政政策 (116) 非伝統的な金融緩和政策 (116) | |
| 4 | 資本規制と為替相場制度 | 119 |

国際金融のトリレンマ (119) 資本自由化か？ 資本規制か？
(120)

CHAPTER
5

国際通貨制度の歴史

123

基軸通貨はどのような役割を果たしたか

はじめに (124)

- 1 国際通貨, 基軸通貨, 時代区分 125
国際通貨とは何か (125) 基軸通貨とは何か (127) 国際通貨制度の時代区分 (128)
- 2 第一次世界大戦以前 129
■ 国際金本位制の時代
制度の背景と特徴 (129) 基軸通貨 (129) なぜポンドが基軸通貨だったのか：覇権安定論 (131) 「世界の銀行」としてのイギリス：資金の貸出と受け入れ (132) 国際金本位制の成果と崩壊 (133)
- 3 1920年代 135
■ 再建金本位制の時代
制度の背景と特徴 (135) 2つの基軸通貨：複数基軸通貨制 (135) なぜ複数基軸通貨制になったのか (136) 2つの「世界の銀行」(137) 再建金本位制期の成果：1925～29年 (138) 再建金本位制の問題点 (138) 再建金本位制の崩壊：1929～31年 (139)
- 4 1930年代 140
■ 通貨ブロックの時代
制度の背景と特徴 (140) 通貨ブロック期の基軸通貨 (140) 「通貨ブロックの銀行」(142) 通貨ブロックの成果とその後 (143)
- 5 第二次世界大戦後 143
■ ブレトンウッズ体制の時代
制度の背景と特徴 (143) 第二次世界大戦後の基軸通貨 (145) なぜドルが基軸通貨になったのか：覇権安定論 (145) 「世界の銀行」(146) ブレトンウッズ体制の成果 (147) ブレトンウッズ体制の崩壊 (147) ブレトンウッズ体制の教訓 (148)

はじめに (152)

- 1 世界で生じる通貨危機と金融危機 153
アジア通貨危機 (153) 世界金融危機 (155) ユーロ危機 (157) 通貨危機と金融危機の特徴 (161)
- 2 金融危機への対応 163
金融政策・財政出動、スワップ協定・地域協力 (163) 金融規制での対応：銀行同盟、バーゼル規制 (164)
- 3 国際金融機関の担う役割 172
国際通貨基金 (IMF) (172) G20 (Group of Twenty) (175) 金融安定理事会 (FSB) (176)

はじめに (182)

- 1 「不安定」でも「安定的」なドル体制 182
戦後国際通貨関係の中心にある米ドル (182) アメリカの対外赤字拡大とドル相場 (183) 「弱くて強いドル」とユーロ市場 (184) 1970年代後半の国際資金循環：中南米危機とドル (186) 1980年代後半の国際資金循環：日本のバブルとドル (187) 1990年代後半の国際資金循環：主役に戻るアメリカ (188) ドルを中心とする国際通貨制度をめぐる議論 (189)
- 2 新興国の台頭と既存パラダイムへの挑戦 191
世界金融危機と新興国の台頭 (191) IMF ガバナンスと新興国 (192) 新しい地域国際金融機関 (193) 人民元の国際化を進める中国 (195) 人民元建て貿易決済 (196) 人民元の資本取引の自由化 (197)
- 3 ヨーロッパ通貨統合の新たな進展 199
ヨーロッパ通貨統合の意味 (199) 国際金融のトリレンマとユーロの位置づけ (201) 3つの視点から考えるユーロの展望 (202)

4 国際通貨体制の展望 206

通貨の国際通貨化と準備通貨の観点 (206) 国際通貨体制の
展望 (207)

引用・参考文献 211

事項索引 215

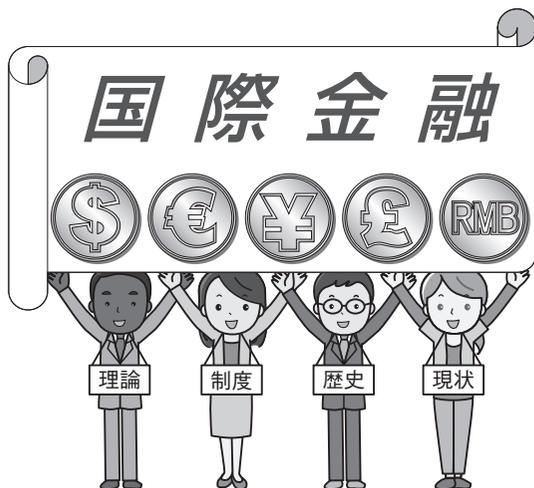
人名索引 222

Column ● コラム一覧

- ① 円相場と日本の貿易収支 23
- ② 国際収支表にみられるスポーツの国際大会の影響 43
- ③ 東京国際金融センター構想 84
- ④ 日銀の非伝統的金融緩和と円相場 118
- ⑤ 歴史小説にみる「国際金融史のなかの日本」 149
- ⑥ 日本の役割：金融危機，国際金融ガバナンスについて 177

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

身近に感じる国際金融



INTRODUCTION

本書『身近に感じる国際金融』は、「理論」「制度」「歴史」「現状」の4つの視点からバランスよく国際金融を学べるようになっていきます。現在の国際金融の状況は目まぐるしく変化しています。旅行するのなら、円高？ 円安？ の話題をきっかけに、私たちをとりまく世界情勢に目を向けながら、一緒に国際金融の舞台をのぞいてみましょう。

国際金融とは何だろう

世界の金融は大きく変化しつづけながら、長い時間をかけて進展しています。グローバル化、国際化といわれて少なくとも30年以上は経っていますが、日本に住んでいるみなさんの生活にも関係していることがいくつもあります。たとえば、車に乗る人はガソリンの値段が気になるでしょう。それにはニューヨーク市場の原油の先物相場での値付けが関係しています。また、アメリカに旅行する人は日本円を米ドルに両替しないといけません。空港や銀行、郵便局の一部で外貨を交換することはできますが、円高のときに替えるべきか、円安のときだとどうなるか、これも海外に出かけるときには関係してきます。

円高と円安：アメリカに行くときにはどちらがいい？

今度アメリカに行きたいんだけど、円高と円安のどちらのときに両替したらいいかな？



出国のときは円高、帰国のときは円安のときに、両替するといいよ。



たとえば、円とユーロの場合。ルイ・ヴィトンのバッグが1000ユーロだとしましょう。1ユーロ=110円のときは、バッグは11万円です。しかし、1ユーロ=160円になったとき、バッグは16万円となり、えっ、5万円も高くなるの！という話になります。

本書を執筆するにあたって、著者たちは、国際金融をめぐる現象や課題を2017年現在、何が必要で、どんなことを考えることが学生のみなさんに有益なのかなどについて、議論を重ねてきました。そして今回、勤務先の大学で教壇に立ちながら感じたことを話しあい、わかりやすく、時宜に合った内容も取り上げ、身近に感じてもらいたいという思いをもって書いています。また、このテキストは、2016~17年に執筆が進められており、最新の事象も各章に込

められています。かつやわらかな筆致ですので、知識がない方でも、さらりと入れると思います。

■ 本書の構成 ■

本書は7つの章から構成されています。概要をみてみましょう。

第1章の「外国為替市場と為替相場——為替の動きをいかに読むか」（五百旗頭）では、最も身近に感じられる為替相場（レート）の変化をどのように読み取るかについて、わかりやすく解説しました。為替の取引とはいったい何でしょうか？ また、為替を取り扱う外国為替市場の仕組み、銀行間市場と対顧客市場の違いを知ることはとても役立ちます。一方で、最近話題の仮想通貨について、ひいては円キャリー・トレードといった先端的な言葉も出てきます。円高、円安や、為替相場の決まり方、ドル投資の（外貨で運用する）リスクなどについて、体系的に学べる内容です。

第2章の「国際収支と対外資産負債残高——どの国と、何をどれだけ取引しているのか」（飯島）では、「国際収支ってよく聞けど、どう利用するの？」という疑問に答えるため、日本のモノの出入りやお金の出入りを把握する仕組みを学びます。また、日本が純資産の国であることも、資産と負債の残高表をみることで理解することができます。日本のいわば“家計簿”を知ることによって、お金の流れと状態の双方が理解でき、地域間の資金の移動の様子もわかるようになります。金融収支という新しい言葉や外貨準備の役割についても理解できる内容になっています。

第3章の「国際金融市場——どこで、誰が、何を取引しているのか」（菅原）では、金融取引を行う「場」である市場^{しじょう}について解説していきます。取引所の様子、リスクとヘッジ（回避すること）、いま話題のタックスヘイブンの知識が身に付きます。また、金融派生商品（デリバティブ）の内容が紹介されます。さまざまな金融取引のうえで、いかにリスクと向き合うかがわかる内容になっています。お金を取り扱う市場を理解できると、国際金融がぐっとわかるようになります。

第4章の「為替相場制度と経済政策——政府は為替相場とどう向き合うか」（五百旗頭）は、世界の各国が採用している為替相場制度がどのようなものかが

わかる内容となっています。変動相場制，固定相場制，より詳しくはクローリング・ベッグ制，あるいはカレンシーボード制も理解できるようになっています。そして，円・ドル相場に深くかかわる為替介入の仕組みを取り上げています。マンデル＝フレミング・モデルや国際金融のトリレンマという少し専門的なキーワードもこの章を読めば，すっと頭に入ってくるはずです。

一方で，第5章「国際通貨制度の歴史——基軸通貨はどのような役割を果たしたか」（菅原）では，国際通貨が歩んできた長い時間をたどります。歴史がわかると「今」がよりクリアにわかります。国際通貨とは何だろうかという問いに始まり，第一次世界大戦以前と以後，1920年代の再建金本位制の時代，30年代の大恐慌期，ブレトンウッズ体制といういずれも国際金融制度の形成史上，避けて通れない「本流」を解き明かしています。そこには，英ポンドが米ドルに基軸通貨のバトンを渡す経緯が記され，時代の激変に対する各国の様子を深く知ることができます。J.M.ケインズやC.キンドルバーガーといった後世へ多大な影響を与えた著名な経済学者の話も出てきて，歴史の威力と魅力を如何なく発揮しています。

続いて，第6章「金融危機と危機への対応——国際金融ガバナンスはどのような役割を担うか」（佐藤）では，世界で起きた数々の金融危機のなかから，アジア通貨危機，世界金融危機，ユーロ危機の3点を取り上げ，国家・地域・国際機関がどのように向き合ってきたのかについて説明します。ベイルイン，ベイルアウトという最近よく使われだした言葉も解説します。本章は全体を通して，国際金融のガバナンス（統治）の観点から危機対応をまとめています。なお，日本の危機対応と国際機関における役割についてもコメントしています。

最後に第7章「新しい国際通貨体制の模索——ドル体制はいつまで続くか」（飯島・佐藤）では，変動相場制のもとにあっても，ドル体制が国際的な資金循環のなかでその起点となっていること，国際金融ガバナンスと新興国の台頭，アジアインフラ投資銀行の創設，人民元建て決済の広がり（元の国際化）などについて取り上げています。この章では，これまでとこれからの国際通貨制度について3つの視点から考えています。1つは，変動相場制以降の国際資金循環においてアメリカの対外赤字やドルが果たした役割を検討し，これまでのドル体制を振り返っています。また2つ目は，世界金融危機以後に新しく登場し

た国際金融がバナンスと新興国の台頭、なかでも中国と人民元の国際化について取り上げています。3つ目は、国際通貨制度のなかで単一通貨導入という特別な取り決めを選択したヨーロッパ通貨統合の進展と課題について、イギリスの国民投票の結果（EU離脱）にもふれつつ説明します。最後に、国際通貨制度の展望について、一緒に考えていきましょう。

4つの観点

このテキストでは、図0.1のように、①理論的視座（原則と仕組み）、②制度的視座（システム）、③歴史的視座（移り変わり）④現状分析的視座（今の情勢）というおもに4つのフィールドで書かれています。これらのアプローチ（観点）から、バランスよく理解していくことが理想的です。けれども、どの方法が自分に最もじっくりくるか、味わいながら読み進めてもいいでしょう。何か1つでも、自分の得意とするアプローチを発見できたらいいですね。

この4つの観点をふまえた各章の見取り図が、図0.2です。

本書の使い方

本書は、大学の経済学部や商学部、経営学部などで開講されている「国際金融論」とその関連科目の、半期2単位分または2クォーター分で使うことを想定しており、バランスよくオーソドックスな構成となっています。

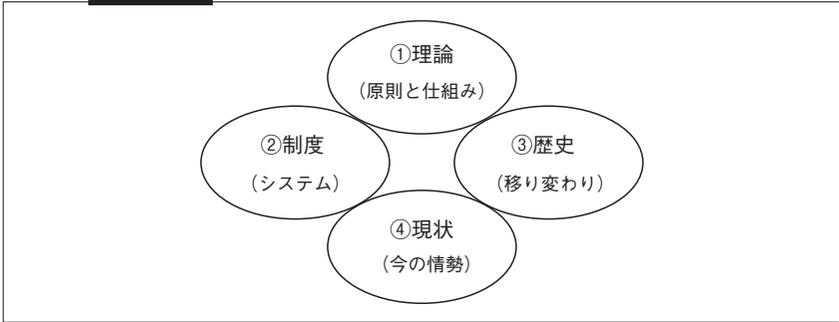
各章の各節ごとにQuestionが設けられていて、理解を確かめながら、読み進めることができます。

また、わかりやすくかつ必要な図表が用いられています。そして、国際金融を理解するためのキーワードを脚注で短く解説しています。さらにコラムで、各章のテーマと日本との関係を中心に、身近な話題を提供しています。なお、さらなるレベルアップと発展的理解のために、各章の末尾に文献も紹介していますのでチャレンジしてみてください。

それでは、国際金融の豊かな世界をのぞいてみましょう！

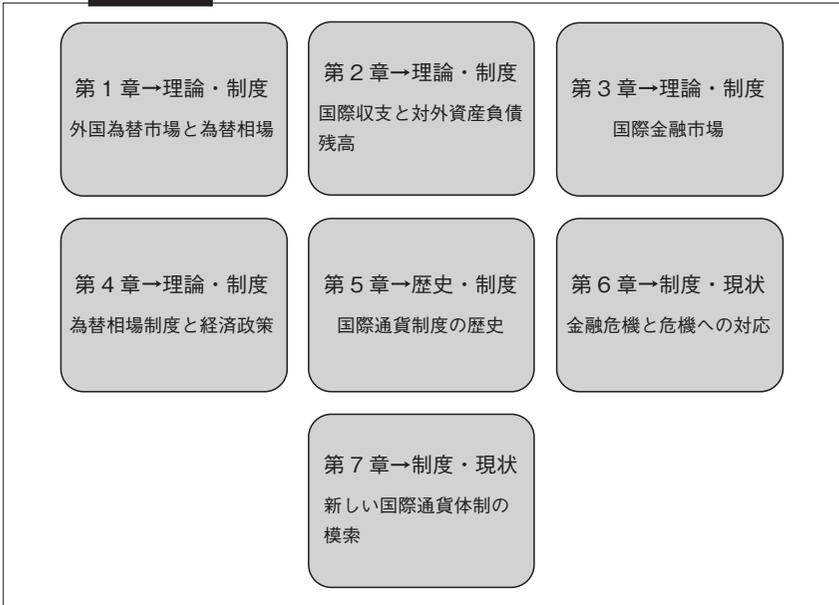
CHART

図 0.1 国際金融に対する 4 つのアプローチ



CHART

図 0.2 各章の見取り図



外国為替市場と為替相場

為替の動きをいかに読むか



成田空港で両替する海外旅行者ら（2015年）

写真提供：時事通信フォト

INTRODUCTION

国際金融と国内金融を切り分けるものは何でしょうか？ おそらく外国為替市場と為替相場でしょう。国境をまたぐ国際金融取引には、必ずこの2つがかかわってくるからです。そのため、本章では、本書を通して国際金融問題をさまざまな角度から考えていく手始めとして、外国為替市場と為替相場の基礎を学びます。

①では外国為替市場の概要と為替相場の読み方について、②では為替相場の影響について、③と④では為替相場の決め方について、順に学んでいきましょう。

KEYWORD

ビッド・アスク・スプレッド 為替ブローカー 外国為替証拠金取引 フォワード取引 為替スワップ 実質為替相場 実効為替相場 購買力平価説 円キャリー・トレード

はじめに

翔子さんは9月から1年間アメリカの大学に留学するため、準備に追われています。キャンパスでサークルの友人、恵理さんにばったり出会い、思わず愚痴をこぼしてしまいました。

翔子：「最近、円安ドル高が進んでて困るよ～。知ってる？ 1ドル=120円だよ！ ついこないだまで1ドル=100円だったのに。もう泣きそう！」

恵理：「確かにねー。20円の円安は痛いね。私が高2の夏に語学留学したときは1ドル=80円だったから。おかげでお土産を山のように買えたよ」

翔子：「1ドル=80円！？ ずるーい！ 今度の滞在費、全部で5000ドルかかるんだよ。1ドル=80円だったら40万円で済むじゃない。でもいまは1ドル=120円だから60万円だよ。20万円の差は痛すぎるわ」

恵理：「ついてないね！ テレビのニュースは『円安進行で日経平均株価が上昇しました』って喜んでるけど、翔子にとってはたまったもんじゃないね。でも、いいじゃない。楽しいアメリカでの生活が待ってるんだから。ああ、私もまた留学したいなあ。TOEICがんばらなきゃ」

翔子：「でも、どうして為替相場ってこんなに大きく動くのかな？ 円高になったり、円安になったり。恵理はわかる？ 私、最近為替にちょっと興味持ったから、こんな本を読みはじめたんだ」

恵理：「『身近に感じる国際金融』？ なんだかおもしろそうなタイトルだね！」

テレビのニュースで聞く、「円安ドル高」などの為替相場（レート）。私たちの生活にもさまざまにかかわっているこの為替相場は、どのようにして決まっ

ているのでしょうか？ さあ、私たちも為替相場について学びましょう。

1 外国為替市場

外国為替市場

ドラム、レフ、ランド、クローネ。ご存じの通りこれらは楽器、カメラ、テーマパーク、有名洋菓子店の呼称です。と同時にすべて通貨の名前でもあります。ドラムはアルメニア、レフはブルガリア、ランドは南アフリカ、そしてクローネはデンマークやノルウェーで使用されている通貨の名前です。通貨といえはまず円やドル、ユーロ、ポンドを思い浮かべる人が多いでしょう。しかし、世界には2016年現在170を超える多様な通貨が流通しています。

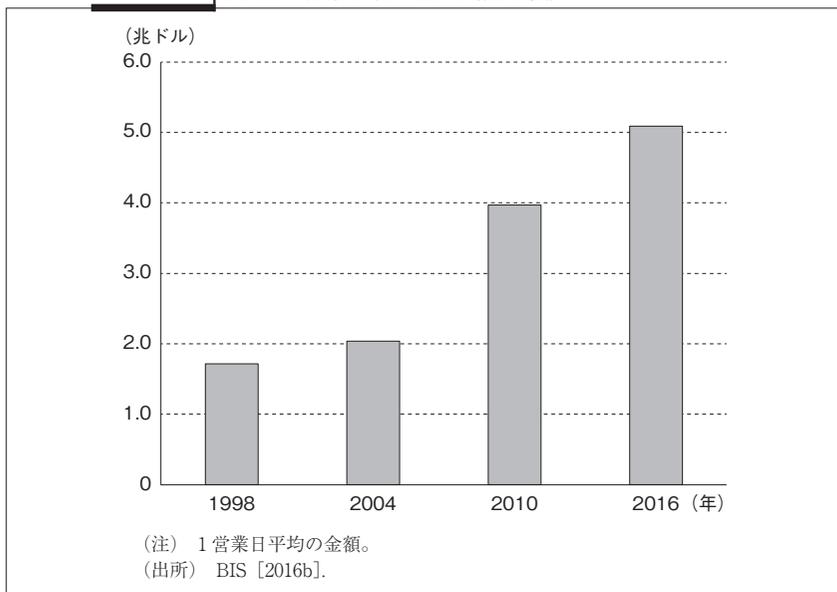
ヨーロッパのユーロのように、複数の国が共通通貨を法定通貨（支払いを受けた人が受け取りを拒否できないことを法律で定めた通貨）としている地域もありますが、基本的には国が違えば通貨も違います。そのため、海外に旅行するとき、外国から商品を輸入するとき、外国企業の株式に投資するときには、まず外国通貨（外貨）を手に入れなければなりません。海外旅行のとき成田空港や関西国際空港で円をドルに換えた経験がある人は多いと思います。

このように通貨と通貨を交換することを外国為替取引または外為取引がいためと呼びます。図1.1に世界全体の外国為替取引高の推移を示しました。ここ20年近くの間外国為替取引高は劇的に増加してきました。1998年には1営業日当たり1.7兆ドルだったのが、2016年には5兆ドルと3倍近くに増えています。背景には、新興国の経済成長による世界貿易の拡大や、国際金融・資本取引の急拡大があります。情報通信技術の飛躍的進歩により、為替投機（通貨の値上がり・値下がり賭けて売買差益を狙う為替取引）を行う投資家が秒単位で通貨売買を繰り返すようになったことも大きいと考えられます。

24時間市場

外国為替市場は1日24時間、世界のどこかで常に取引が可能のため、しばしば24時間市場と呼ばれます。どの国の市場でも午前8時から午後5時まで

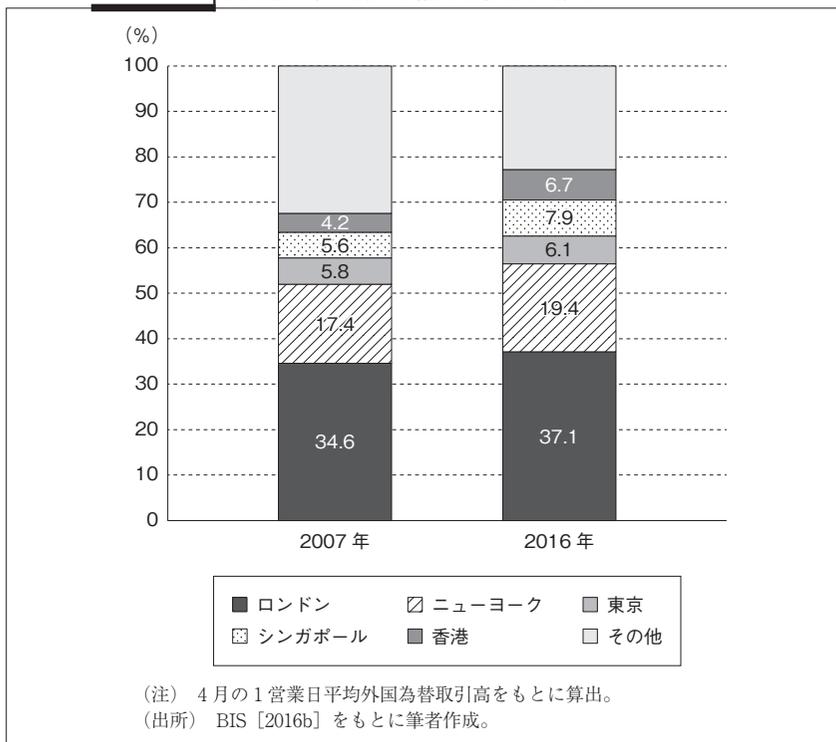
CHART 図 1.1 世界の外国為替取引高の推移



取引が行われるため、時差に応じてウェリントン（ニュージーランド）→シドニー→東京→香港・シンガポール→フランクフルト→ロンドン→ニューヨークの順に市場が開いていきます。日本時間で月曜日の午前5時にウェリントン市場が開き、土曜日の午前7時（アメリカが夏時間のときは6時）にニューヨーク市場が閉じるまで、絶えず世界のどこかで為替取引を行うことが可能なわけです。

図 1.2 に市場ごとの取引高シェアの推移を示しましたが、ロンドン市場のシェアが圧倒的です。2016年には世界の外国為替取引の4割近くがロンドンで行われています。ロンドンの金融街シティが世界の金融の中心地といわれるゆえんです。続いて規模の大きいのがニューヨーク市場で、ロンドンと合わせると世界の取引高合計の5~6割を占めています。このため、日本時間の深夜に、世界の外国為替取引が最も活発になるといわれています。ロンドン市場とニューヨーク市場が同時に開く時間帯だからです。一方、東京市場のシェアは近年低下傾向にあり、16年にはシンガポールと香港の後塵を拝しました。

CHART 図 1.2 外国為替取引高の主要市場別内訳



為替相場

外国為替市場で成立する通貨と通貨の交換比率が外国為替相場（以下、為替相場）です。為替相場は2つの通貨の相対価格なので、一方の通貨の価値が上がることは、もう一方の通貨の価値が下がることを意味しています。言い換えれば、「円安ドル高」や「円高ドル安」は1セットであり、「円安ドル安」や「円高ドル高」という概念はありません。なお経済学では、ある通貨の価値が他通貨に対して上昇することを増価、下落することを減価と呼びます。たとえば、円ドル相場が1ドル=90円から1ドル=100円に動いた場合、すなわち「円安ドル高」が進んだ場合、ドルが円に対して増価し、円はドルに対して減価したと表現します。

また、表記方法もいずれの通貨を基準とするかによって2通りあります。1つは、1ドル=100円、1ユーロ=150円というように、外貨1単位の価値を自国通貨で測る方法で、これを自国通貨建て（または邦貨建て）為替相場と呼びます。もう1つは、1円=0.01ドル、1円=0.0067ユーロのように、自国通貨1単位の価値を外貨で測る方法で、これを外国通貨建て（外貨建て）為替相場と呼びます。

日本では邦貨建て表記が一般的です。そのため、1ドル=100円から1ドル=110円へと為替相場の数値が上昇すると円安（円の減価）、1ドル=100円から1ドル=90円へと数値が下落すると円高（円の増価）を意味することに注意しましょう。

■ ビッド相場とアスク相場

テレビのニュースでは「今日の東京外国為替市場、円相場の終値は1ドル=120円16銭から120円20銭でした」というように、2つの相場が報道されます。画面でも「1ドル=120.16 - 120.20円」と表示されます。Yahoo!ファイナンスなどでも同様ですね。これはどういう意味なのでしょう。

この例でドルの値が安いほうの相場、1ドル=120.16円は、「1ドル=120円16銭でドルを買って円を売りますよ。誰かドルを売ってくれませんか？」という注文が出ていることを示しています。これをドルのビッド相場と呼びます。それに対し、ドルの値が高いほうの相場、1ドル=120.20円は、「1ドル=120円20銭でドルを売って円を買いますよ。誰かドルを買いませんか？」という注文が出ていることを示しています。これをドルのアスク相場と呼びます。また、ビッド相場とアスク相場の乖離はビッド・アスク・スプレッドと呼ばれます。

keyword

ビッド・アスク・スプレッド 外国為替市場における通貨の買い気配値（ビッド相場）と売り気配値（アスク相場）の差のこと。対顧客市場では銀行が提示するビッド相場とアスク相場の差、銀行間市場では外貨の買い指値の最高値と売り指値の最安値の差になります。為替取引の活発さを反映し、取引量の多い（少ない）通貨ペアほどビッド・アスク・スプレッドは小さく（大きく）なります。

銀行間市場と対顧客市場

みなさんは海外旅行の際に次のような経験をしたことがないでしょうか。ニュースでは1ドル=120.16 - 120.20円と報道されているのに、いざ空港で円をドルに換えようと思ったら、1ドル=122.20円と報道相場より大幅に不利な相場で両替することになったという経験です。通常、銀行や両替所で円貨を外貨に換えるときには報道相場より2円ほど多く払い、外貨を円貨に換えるときには2円ほど少なく受け取ります。どうしてでしょうか？

外国為替市場は銀行間市場と対顧客市場に分かれている、というのがその答えです。ニュースで報道される為替相場は銀行間相場と呼ばれ、銀行と銀行が通貨を交換する銀行間市場における相場です。それに対して、銀行が、個人や、保険会社・商社・メーカーなど銀行以外の企業と通貨を売買する場を対顧客市場、銀行が顧客に対して提示する為替相場を対顧客相場と呼びます。

さらに、対顧客相場は、現金を両替するときに適用される現金相場と、円預金を外貨預金と交換するときに適用される電信相場に分かれます。電信相場は銀行間相場の±1円、現金相場は銀行間相場の±2~4円の水準に設定されるのが一般的です。現金相場のほうが、顧客が銀行に支払う手数料は高くなるのです。さらに電信相場については、銀行が顧客に対して外貨を売るときの相場をT.T.S. (Telegraphic Transfer Selling rate)、銀行が顧客から外貨を買うときの相場をT.T.B. (Telegraphic Transfer Buying rate) と呼びます。銀行間レートの仲値が1ドル=120.18円るとき、T.T.S. は1ドル=121.18円、T.T.B. は1ドル=119.18円のように設定されることが多く、私たちが円預金をドル預金に換えるには1ドル当たり121.18円を支払うこととなります。

市場参加者

外国為替市場で取引を行うのは誰でしょうか？ 対顧客市場と銀行間市場では当然ながら参加者も違ってきます。対顧客市場では「銀行」が「顧客」と通貨を交換するのに対し、銀行間市場では「銀行」と「銀行」が通貨を交換します。

銀行からみた「顧客」には、海外旅行者、個人投資家、一般企業、機関投資

事項索引

*太字の数字は、keywordの掲出ページです。

● アルファベット

ADB →アジア開発銀行
ABDI →アジア開発銀行研究所
AfDB →アフリカ開発銀行
AIG 156
AIIB →アジアインフラ投資銀行
AMF →アジア通貨基金構想
AMRO 178
BCBS →バーゼル銀行監督委員会
BIBF 153, 154
BIS →国際決済銀行
BNP パリバ 156
CBA →カレンシーボード制
CDS 67
CDS (店頭) 81
CMI →チェンマイ・イニシアティブ
CMIM →チェンマイ・イニシアティブ・マル
チ化
CMU →資本市場同盟
CNAPS →中国国内の決済システム
CoCo 債 (偶発転換社債) 166
EBRD →欧州復興開発銀行
EBU →欧州銀行同盟
ECB →欧州中央銀行
ECSC →欧州石炭鉄鋼共同体
EDIS →欧州預金保険スキーム
EEC →欧州経済共同体
EMS 203
EMU →経済・通貨同盟
ERM 154, 203
ESM →欧州安定メカニズム
EURATOM →欧州原子力共同体
FDIC →預金保険公社
FRB →連邦準備制度理事会
FSB →金融安定理事会
FSF →金融安定化フォーラム
FX 取引 16, 53
G5 175
G7 173, 175, 191
G20 →20 カ国財務相・中央銀行総裁会議
GIIPS 157, 159, 203
G-SIFIs 165

IBRD →世界銀行 (国際復興開発銀行)
IDB →米州開発銀行
IMF →国際通貨基金
IMF-WBG →国際通貨基金・世界銀行グル
ープ
IT 188
JSTs 168
Jカーブ効果 49
KAs (Key Attributes) 177
LIBOR (ロンドン銀行間出し手金利) 158,
159
LOLR →最後の貸し手
M&A →合併・買収
MDB →国際開発金融機関
NCAs 168
NDB →新開発銀行
OPEC →石油輸出機構
QE →量的緩和
QQE →量的・質的金融緩和
QQE with a Negative Interest Rate →マイナ
ス金利付き量的・質的金融緩和
RQFII →人民元適格海外機関投資家
SDR →特別引出権
SIFIs →システム上重要な金融機関
SRB →単一破綻処理理事会
SRF →単一破綻処理基金
SRM →単一破綻処理メカニズム
SSM →単一監督メカニズム
TBTF (too big to fail) 165, 169
TBTS (too big to save) 165, 169
TLAC →総損失吸収力
T.T.B. 13
T.T.S. 13

● あ行

相対取引 69, 76
アウトライイト取引 18
アキコミュノテール 203
アジアインフラ投資銀行 (AIIB) 4, 194,
195, 207
アジア開発銀行 (ADB) 178, 193
——研究所 (ABDI) 178
アジア通貨危機 4, 85, 121, 153, 155, 161, 162,

172, 176, 177, 203
 アジア通貨基金構想 (AMF) 177
 アスク相場 12
 アブソープション・アプローチ 51
 アフリカ開発銀行 (AfDB) 193
 アベノミクス 118
 アメリカ国債 54, 57, 104, 188
 イギリスのEU離脱 5, 204, 208
 イギリスの国民投票 5, 204, 205
 一物一価の法則 26
 移転価格操作 91
 インフレ率 25, 26, 100
 ウェルナー (ヴェルネル) 報告 200
 エキゾチック型 76
 円売りドル買い介入 102, 104
 円キャリー・トレード 3, 28
 円ブロック 140, 141
 オイルマネー 186
 欧州安定メカニズム (ESM) 161
 欧州委員会 204
 欧州銀行同盟 (EBU) 168, 204
 欧州経済共同体 (EEC) 203
 欧州原子力共同体 (EURATOM) 203
 欧州石炭鉄鋼共同体 (ECSC) 203
 欧州中央銀行 (ECB) 160, 161, 164, 168,
 170, 171, 199, 202, 203, 206
 欧州復興開発銀行 (EBRD) 193
 欧州預金保険スキーム (EDIS) 169
 オフショア市場 81-83, 153, 199
 オプション 40, 75, 78

● か 行

海外政府支出 148
 外貨準備 3, 40, 56-58, 101, 104, 109, 129, 155,
 160, 174, 206
 外貨準備高 105
 外貨調達 45, 71
 外貨の期待増価率 31
 外貨保有の制約 45
 外国為替介入 → 為替介入
 外国為替管理 → 為替管理
 外国為替市場 3, 9, 11, 13, 15, 68
 外国為替証拠金取引 15, 16
 外国為替相場 → 為替相場
 外国為替取引 3, 9, 10, 34
 外国口座税務コンプライアンス法 (FATCA)
 92
 外国通貨建て (外貨建て) 為替相場 12
 風向きに逆らう介入 108, 109

貸出条件 → コンディショナリティ
 課税逃れ 91
 風に乗る介入 108, 109
 仮想通貨 3, 19
 価値表示 125, 126
 価値保存 125, 126
 合併・買収 (M&A) 40, 188
 カバー付き金利平価 33
 カバーなし 74
 — 金利平価 33, 74
 — 金利平価式 28
 株価バブル 138
 株式市場 75
 空売り 73, 74
 カレンシーボード制 (CBA) 4, 101, 155
 為替介入 (外国為替介入) 4, 14, 41, 56, 57,
 98, 103, 104, 107-109, 188, 203
 為替管理 (外国為替管理) 119, 120, 140, 143
 為替差益 14
 為替差損 142
 為替スワップ取引 18, 34
 為替相場 (レート) 3, 8, 11, 20, 23, 25, 26, 28,
 29, 44, 45, 47-50, 73, 86, 96, 128, 139, 144,
 155, 172, 177, 200, 203, 208
 — 制度 3, 97, 102, 111, 119, 153, 154, 172,
 208
 公式の — 97
 事実上の — 97
 為替ディーラー 15
 為替投機 9, 121, 153, 154, 174, 200, 201
 為替取引の自由化 146
 為替フォワード 78, 79
 — 取引 86
 為替ブローカー 14, 15
 為替平衡操作 (為替介入) 56
 為替リスク 17, 30, 31, 56, 73, 74, 78, 87, 183,
 196, 200
 関税と貿易に関する一般協定 (GATT)
 144
 機関投資家 14, 70
 基軸通貨 4, 58, 125, 127-131, 135, 158, 182,
 187, 190, 206, 208
 — 国 46, 132, 137, 138, 142, 183, 189
 規 制 82, 90, 174, 177, 185, 199 → 「金融
 規制」も参照
 金利 — 82
 資本 — 88, 119, 120, 122, 140, 144, 148,
 155, 201
 通貨取引 — 87, 88

- 投機 — 87
- 期待為替相場 28, 29, 31
- 期待収益率 30-32
- 共通通貨 9, 102
- 共同声明 (コミュニケ) 176
- 居住者と非居住者 37
- ギリシャ危機 159, 161, 202, 205, 208
- 金 128, 129, 136, 139, 141, 145, 200
- 銀行貸出市場 75
- 銀行間金利 107, 159
- 銀行間市場 3, 13, 14, 125, 126, 158
- 銀行間相場 13
- 銀行秘密主義 92
- 金準備 136, 137, 139, 145
- 金ドル交換 140, 144, 184
 - 停止 147
- 金ブロック 140, 141
- 金本位制 128, 135, 139, 141, 149
- 金融安定化 192
 - フォーラム (FSF) 176
- 金融安定理事会 (FSB) 152, 164, 165, 168, 176-178
- 金融緩和 (政策) 112, 114, 164
- 金融規制 152, 163, 164, 166, 170, 176, 204, 205
 - 「規制」も参照
- 金融市場 67, 71, 183-185
- 金融収支 3, 38, 40, 42, 53, 54, 56
- 金融商品 74
- 金融政策 51, 96, 111, 120, 152, 163, 164, 171, 175, 189, 208
 - の自由 139
- 金融同盟 206
- 金融取引税 88, 89
- 金融派生商品 → デリバティブ
- 金融引き締め (政策) 51, 113, 114
- 金利オプション 81
- 金利裁定 33
 - 取引 18, 32, 34
- 金利スワップ 76, 81
- 金利フォワード (店頭) 81
- 金利平価 112, 113, 115
 - 式 32
 - 説 25, 28, 29, 32
- 近隣窮乏化策 48
- 偶発転換社債 → CoCo 債
- クラウドディングアウト効果 115, 116
- グラス = スティール法 166
- グローバル・インバランス 58, 59
- グローバル化 2, 130, 173
- 金融 — 53, 200, 208
- グローバル経済 124
- クローリング・ベッグ制 4, 99, 100
- 景気循環 110
- 経済援助 146
- 経済・通貨同盟 (EMU) 160
 - 完成しつつある — 205
 - 真の — 205
- 経常収支 38, 40, 42, 44, 45, 48, 50-53, 58, 60, 61, 184
- 経常収支赤字 44, 45, 47, 51, 52, 58, 59, 61, 184, 188
 - の維持可能性 (サステナビリティ) 問題 59
- 経常収支黒字 44, 58, 184
- 経常収支不均衡 44, 58, 60
- 経常取引の自由化 195
- 契約・表示通貨 130, 206, 207
- 決済銀行 (クリアリング・バンク) 196, 197
- 決済通貨 130, 206, 207
- 原資産 75
 - 市場 75
- 現物取引 79
- 交換手段 125, 127
- 航空機ファイナンス 66
- 公定平価 99, 101
- 購買力平価説 25-27
- 国際開発金融機関 (MDB) 193, 194
- 国際協調 44, 203, 204
- 国際金本位制 129, 152
 - 期 133
- 国際金融市場 3, 54, 59, 60, 67-71, 74, 185
- 国際金融センター 84
- 国際金融のトリレンマ 4, 119-122, 139, 140, 144, 201-203
- 国際決済銀行 (BIS) 166, 167, 176
- 国際資金循環 4, 187-189
- 国際収支 3, 61
 - 統計 37, 38, 40, 54, 62
 - 表 36, 42, 61
- 国際通貨 4, 56, 58, 101, 125-127, 182-184, 195, 199, 206, 208
 - 制度 4, 5, 128, 130, 131, 143, 152, 179
 - 制度改革 190
 - 体制 4, 182, 200, 201, 207, 208
- 国際通貨基金 (IMF) 37, 57, 85, 97, 102, 144, 152, 154, 155, 161, 164, 167, 172-174, 177, 178, 192, 193, 202
 - の議決権 192

—の国際収支マニュアル 43
—8 条国 195
国際通貨基金・世界銀行グループ (IMF-
WBG) 164, 173, 178
国際投資 53
国債の売りオペレーション (売りオペ) 107
国民所得計算 50
個人投資家 14, 15
固定相場 85, 87, 98, 128, 139, 202
固定相場制 4, 97, 99, 100, 113, 114, 116, 119,
120, 153, 154, 184, 200
厳格な— 97
伝統的な— 99, 100
コンディショナリティ (貸出条件) 172, 192

● さ 行

再建金本位制 4, 135, 138, 139
債権国 61
債券市場 75, 206
最後の貸し手 (LOLR) 161, 190
財政収支 52
財政政策 51, 52, 111, 115, 176
裁 定 71, 72
—取引 78
債務国 61
債務不履行 (デフォルト) 142, 186
先 物 40, 75, 76, 154, 207
—相場 2, 207
—取引 79
サービス収支 39, 43
サブプライム・ローン 156-159
サミット 175, 191
残高 (ストック) 統計 61
三面等価の原則 50, 52
シェンゲン協定 204
時間軸効果 117
直先スプレッド 17
自己勘定取引 70
自国通貨建て (邦貨建て) 為替相場 12
資産価格 27
市 場 3, 69
—介入 85, 125
—取引 69, 76
—の歪み 72
システム上重要な金融機関 (SIFIs) 177
実効為替相場 22-24, 184, 208
実質為替相場 21, 22, 24, 100, 113, 115
実質金利 112, 115
実質実効為替相場 23
実 需 66, 88, 89
—原則 121
シティ 156
支払い手段 126, 127, 148
資本移転等収支 42
資本移動 53, 125, 174, 200
—の自由 119, 120, 139, 202
—の自由化 121, 153, 163, 172, 173, 174,
201
資本市場同盟 (CMU) 206
資本収支危機 88
資本主義の黄金時代 147
資本取引の自由化 85, 195, 197, 199
資本輸出 132, 137, 138, 146
社会的市場経済 205
ジャパン・マネー 187
自由な資本移動 31, 112, 113, 120
周辺国 133, 142, 143, 147
自由・無差別・多角化 145
縮小為替変動幅 (スネーク) 200, 203
出資割当額 (クォータ) 192
準備資産 129, 145
準備通貨 101, 125, 127, 135, 141, 142, 145,
206, 207
証券化商品 54-56, 59, 60, 189
証券投資 40, 54, 55, 187
証拠金 16
商品裁定 26, 27
所要準備 106
新開発銀行 (NDB) 194, 195
新興国 4, 5, 54, 122, 175, 190-194
人民元相場 198
人民元建て決済 4, 196, 208
人民元建て債券 198
人民元建ての外国債 (パンダ債) 198
人民元建てユーロ債 (点心債) 198
人民元適格海外機関投資家 (RQFII) 198
人民元の国際化 4, 5, 195, 197, 199, 207, 208
信用取引 16
スタグフレーション 200
スポット市場 104
スポット取引 (直物取引) 17
スポット・レート 17, 30, 33, 154
スミソニアン協定 200
スワップ 40, 75, 76, 171
—協定 57, 164
世界銀行 (国際復興開発銀行, IBRD) 144,
149, 164, 172, 177, 193
世界金融危機 4, 54, 59, 66, 91, 152, 156-158,

162-165, 167, 170, 176, 189, 190-192, 195,
205
世界の銀行 132, 133, 137, 138, 147
石油危機 186, 200
石油輸出機構 (OPEC) 186
節税 91, 92
ゼロ金利政策 116, 117
1930年代の反省 144, 146
選択権 78, 79
総損失吸収力 (TLAC) 167
相対価格 21, 22
想定元本 16, 79, 80
想定金利 80
租税回避地 89
その他投資 40
ソフトロー・アプローチ 166, 167

● た 行

第1次所得収支 39, 51
対外資産負債残高 3, 62
—統計 61
大恐慌 4, 138
対顧客市場 3, 13, 14
対顧客相場 13
対顧客取引 70
第2次所得収支 39, 51
第二輸出入銀行 141
兌換 128, 135
タックスヘイブン 3, 83, 89-92
脱税 91, 92
単一監督メカニズム (SSM) 168
単一市場 170, 201
単一通貨ユーロ 170, 199, 201, 202 → 「ユ
ーロ」も参照
単一破綻処理基金 (SRF) 169
単一破綻処理メカニズム (SRM) 169
単一破綻処理理事会 (SRB) 169
短期金利 111-114, 117
短期資金供給 131, 132, 137, 142
弾力性アプローチ 59
チェンマイ・イニシアティブ (CMI) 164
チェンマイ・イニシアティブ・マルチ化
(CMIM) 164, 178
チャイナ・マネー 187
チャプター・イレブン 155
中央銀行 14, 111, 126, 128, 129
中央銀行当座預金 107
中国国内の決済システム (CNAPS) 196
中心国 133, 143, 147

中長期金利 117
長期資金供給 131, 132, 137, 142, 146
調達コスト 77
直接投資 40, 54, 55, 62, 174, 187, 188, 197
貯蓄・投資バランス (IS バランス) 52, 53
—アプローチ 59
通貨オプション 78, 79, 87
通貨危機 45, 121, 153-155, 161, 164, 172,
174
通貨スワップ 76, 78
通貨戦争 47
通貨同盟 101, 102
通貨の切り上げ (切り下げ) 58, 200, 203
通貨バスケット 57, 100
通貨ブロック 140, 143
強いドル政策 188
手形引受 132, 137, 142
デクシア 159
デフォルト 67, 142
デフレ政策 138
デリバティブ (金融派生商品) 3, 40, 67, 73,
75, 78, 80, 81
—取引 80
電子ブローキング 15
電信相場 13
伝統的な金融政策 117
店頭取引 69, 70, 76, 78
ドイツ IKB 156
投機 71-74, 83, 85-89
投機家 86, 87
東京証券取引所 69, 70
当座預金 133
特別引出権 (SDR) 41, 57, 58, 190, 207, 208
—の価値 57
ドッド = フランク法 164, 166, 168
トービン税 88, 89
取引所 69
—取引 69, 70, 76
トリフィンのジレンマ 147
ドル化 183
公的な— 101
ドル残高 189
ドル体制 4, 189, 190, 199, 208
ドルの供給過剰 148
ドル不足 59, 61, 158, 183
トレーディング 70

● な 行

ニクソン・ショック 147, 200

20 カ国財務相・中央銀行総裁会議 (G20)
92, 152, 167, 169, 173, 175, 176, 191
24 時間市場 79
日露戦争 124
日経 225 先物 72, 79
日経平均株価 8, 21, 118
日本銀行 (日銀) 29, 104, 110, 118, 160, 163
——当座預金 105, 106
ニューヨーク市場 2, 10, 207
ノーザン・ロック 156

● は 行

媒介通貨 185
覇権安定論 131, 137, 148
覇権国 131, 132, 137, 146
バスケット通貨 100, 208
バスケット・ベッグ制 100
バーゼル規制 178
バーゼル銀行監督委員会 (BCBS) 164, 167, 178
バーゼルⅢ 166, 167
ハードロー・アプローチ 167
パナマ文書 90, 92
バンキア 159
非居住者 87, 90
ビッド・アスク・スプレッド 12
ビッド相場 12
非伝統的な金融政策 106, 116, 117
非不胎化介入 107, 118
秘密主義 92
秘密保持 90
ファニー・メイ 156
フィンテック (FinTech) 19, 157
フォルティス 159
フォワード (先渡し) 75, 76
——為替予約 33
——市場 87
——・ディスカウント 18
——取引 (先渡し取引) 17, 32, 73, 79, 86
——・プレミアム 18, 33
——・レート (先渡し為替相場) 17, 33
複式計上方式 38
複数基軸通貨 128
——(体)制 131, 135, 136, 138, 190
負債決済 183
不足資金の調達 71
不胎化介入 107, 118
物 価 20, 22, 25, 27
——の硬直性 112

ブラザ合意 44, 109, 175
ブルーデンス政策 167
フレディ・マック 156
ブレトンウッズ会議 143
ブレトンウッズ協定 143, 144, 172
ブレトンウッズ体制 4, 109, 140, 143, 144, 147, 175, 183, 200
——崩壊 147
ブレーン・パニラ型 76
フロー統計 61
ベア・スターンズ 156
米英金融協定 183
平 価 99, 100, 102
——変更 102
米州開発銀行 (IDB) 193
米ドル 127
バイルアウト (bail-out) 4, 157, 165, 168
バイルイン (bail-in) 4, 165, 168
ヘッジ 3, 71-74, 78, 86, 87
ヘッジファンド 70, 85, 154
ベトナム戦争 148
ペーパーカンパニー 90
変動相場制 4, 24, 97-99, 109, 112, 121, 128, 147, 153-155, 175, 182, 184, 200
自由—— 99, 102, 155, 202
ボイス・ブローキング 15
貿易金融 132
貿易収支 23, 24, 38, 48, 50, 51
貿易摩擦 44
法人税 90
法定通貨 9, 126, 183
保険商品 73
保険料 72
ボルカールール 166, 168
香港通貨管理局 (HKMA) 155
ボンド建て 129, 130
ボンド・ブロック 140, 141, 143, 145, 146

● ま 行

マイナス金利政策 106, 118, 164
マイナス金利付き量の・質の金融緩和 (QQE with a Negative Interest Rate) 163
マクロ経済政策 96
マーシャル・プラン 183
マーシャル＝ラーナー条件 48
マネーストック 105, 106
マネタリーベース 101, 105-107, 111, 114, 116, 118
マネーロンダリング (資金洗浄) 91, 92

マルケ・ブロック 140, 141
マレーシア 87, 88
マンデル＝フレミング・モデル 4, 111, 112,
120
名目為替相場 22, 113
名目金利 112, 115

● や 行

輸出入の価格弾力性 47
ユーロ 2, 205-208 →「単一通貨ユーロ」
も参照
——域 99, 102, 199, 202-207
——危機 4, 66, 91, 162, 203
ユーロ市場 68, 81, 82, 148, 185, 186, 190
ユーロ・ダラー 185
預金保険公社 (FDIC) 166
余剰資金の運用 71
ヨーロッパの単一市場 201

● ら 行

利子 106

リスク 3, 72
——回避的な投資家 32
——中立的な投資家 31, 32
リスボン条約 203, 205
リテール・リングフェンス 168
リーマン・ショック 152, 155, 156, 163, 170
リーマン・ブラザーズ 155, 156
流通現金 105
量的緩和 (QE) 163
——政策 110, 116-118, 203
量的・質的金融緩和 (QQE) 116, 118, 160
レバレッジ 16
連邦準備制度理事会 (FRB) 29, 58, 96, 122,
138, 156, 163, 164, 189, 190, 208
ローマ条約 200, 203
ロンドン銀行間出し手金利 →LIBOR
ロンドン市場 10, 207

● あ 行

安倍晋三 118
アンワル 85

● か 行

キンドルバーガー, C. 4, 131
ケインズ, J. M. 4, 124, 144

● さ 行

スハルト 85
ソロス, ジョージ 85

● た 行

高橋是清 124, 149
トービン, ジェームズ 88

● は 行

バーナンキ, B. S. 58
フレミング, M. 111

● ま 行

マハティール 85-87
マンデル, R. 111



身近に感じる国際金融
International Finance: A Beginner's Guide

2017年6月25日 初版第1刷発行

| | | | | |
|---|----|----|---|---|
| | い | じ | ひ | ゆ |
| | 飯 | 島 | 寛 | 之 |
| | い | お | き | べ |
| 著 | 五 | 百 | 旗 | 頭 |
| 者 | い | しん | 真 | 吾 |
| | さ | とう | ひ | き |
| | 佐 | 藤 | 秀 | 樹 |
| | すが | わ | | あ |
| | 菅 | 原 | | ゆ |
| | | | | む |
| | | | | 歩 |
| 発 | 江 | 草 | 貞 | 治 |
| 行 | | | | |
| 者 | | | | |
| 発 | 株 | 有 | 斐 | 閣 |
| 行 | 式 | | | |
| 所 | 会 | | | |
| | 社 | | | |

郵便番号 101-0051

東京都千代田区神田神保町 2-17

電話 (03)3264-1315 (編集)

(03)3265-6811 (営業)

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・大日本法令印刷株式会社／製本・大口製本印刷株式会社

© 2017, H. Iijima, S. Iokibe, H. Sato, A. Sugawara. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-15044-7

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。